

研究課題	数値に基づく教科横断的な食育授業の開発に向けた基礎的研究		
氏名	星野 亜由美	所属	総合教育科学系生活科学講座
		職名	講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ← 受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 本研究では、数値データに基づく授業構成、教科横断的な実践に特色を有する中学校の食育授業を開発することを目的に、【研究1】から【研究3】に取り組んだ。 【研究1】「骨と健康」に関する教科横断的な食育授業、追跡調査結果の公表とブラッシュアップ 2021年7月に、骨量測定を取り入れたこと、保健、数学、家庭科による教科横断的な実践であることの2点に特色を有する食育授業を実践し、1年後に、追跡調査を行った。2023年度は、これらの成果の公表に取り組んだ。具体的には、「骨と健康」に関する食育授業について、骨量測定が健康や生活習慣への関心を高めると共に、保健、数学、家庭科の各教科の目標を達成することに役立ったことを報告した¹⁾。加えて、追跡調査について、中学生期は骨量増加に重要な時期だが、望ましい生活習慣を営む者は学年進行に伴い低下したこと、2度の骨量測定は、生徒が自身の成長段階を自覚するとともに、エビデンスに基づき生活習慣を考察し、今後の生活を展望することに役立ったことから、継続的な食育が必要と考えられたことを報告した^{2,3)}。更に、継続的な食育の実践に向け、附属T中学校家庭科教諭と協議を行い、学校行事等との接続を図る1年間の年次計画を作成した。 【研究2】大学生を対象とする二つの予備調査の実施 一つ目は、野菜摂取量推定装置の食育への活用可能性を検討することを目的に、2023年5月に大学生54人を対象に、野菜摂取量推定装置による皮膚カロテノイドの測定と、食物摂取頻度調査、野菜摂取への意識等に関する質問紙調査を実施した。結果、野菜摂取レベルと食物摂取頻度調査による「野菜類」、「緑黄色野菜」の推定摂取量との間に有意な正相関がみられたこと、野菜を十分に摂取できている者は1割に留まったこと、対象者の記述から野菜摂取量の可視化は、野菜の摂取不足の自覚、野菜摂取量増加の意欲向上に役立ったことが明らかになった。したがって、野菜摂取量推定装置は、野菜摂取をテーマとした食育に十分活用可能な指標と考えられた。 二つ目は、学校現場で食育を担う家庭科教諭と栄養教諭について、各々の専門性やそれらを生かした協働のあり方を明らかにすることを目的に、2023年10月に、A大学(家庭科教員養成)28人、B大学(管理栄養士養成)122人を対象に質問紙調査を実施した。食物アレルギーに関心がある者、教育は重要だと考える者は9割を占め、大学間で差はみられなかった。一方、食物アレルギーの学習機会が十分にあると答えた者はB大学、食物アレルギー対応に不安を感じる者はA大学で多く、A大学はB大学に比べ食物アレルギーを有する生徒だけでなく、学級や班単位での除去メニュー対応を選択した者が多いことが示された。したがって、食物アレルギーの学習経験や調理実習指導時の対応に関する考え方は大学間で異なった。このことから、食に関し豊富な専門知識を有する栄養教諭と、生徒の発達段階に応じた指導に関する専門性を有する家庭科教諭との連携が望まれた⁴⁾。 【研究3】学校との協働による授業実践 2023年10月に、T小学校4、5年生114人、T中学校2年生125人を対象に、骨や栄養に関する食育講話(1時間)と骨量測定、食習慣・生活習慣に関する質問紙調査を実施した。食育講話は、小学校は特別活動、中学校は家庭科で実施した。骨量の急増期にあたる学童期や思春期において、骨格の健康の維持増進のための食習慣・生活習慣の定着の重要性が示唆されたが、望ましい食習慣を実践する者は、小学生期から中学生期にかけ減少した。これらのことから、小中連携を見通した「骨と健康」に関する継続的な食育支援が必要と考えられた。なお、当初計画では野菜摂取量推定装置を活用予定であったが、実践科教員との協議を踏まえ、骨量測定器を活用することに変更した。			
【研究成果発表方法】			
1) 中学生における「骨と健康」に関する教科横断的な食育の実践，星野亜由美，布谷芽依，岸田恵津，相川美和子，諏訪晶子，谷田幸繁，日本家政学会誌，74(4)202-218 2) 中学生における「骨と健康」に関する教科横断的な食育授業の1年後の骨量と食習慣・生活習慣，星野亜由美，岸田恵津，布谷芽依，相川美和子，日本家政学会誌，投稿中 3) 中学生における食育授業の1年後の骨量と食習慣・生活習慣に関する検討，星野亜由美，岸田恵津，布谷芽依，相川美和子，日本家政学会第75回大会（ポスター発表） 4) 調理実習における食物アレルギー対応に関する大学生の認識-家庭科教員養成課程，管理栄養士養成課程の違いに着目して-，星野亜由美，中岡加奈絵，日本家政学会第76回大会（ポスター発表，予定）			

発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。